

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370843

研究課題名(和文) 解放後朝鮮における社会・文化史研究 - I氏の日記を中心に

研究課題名(英文) Post-liberation Korean Social and Cultural History: A Perspective from Mr. I's Diary

研究代表者

太田 修 (OTA, OSAMU)

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授

研究者番号：00351304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：大韓民国の仁川で生まれ育ち、京城電気株式会社(韓国電力公社の前身)の電気技師だったI氏(1926-2000)が、1945年9月から1953年まで書いた日記(以下、I日記)を研究対象とした。手書きのI日記を翻刻してデータ化し(必要に応じて日本語に翻訳する)、I日記を分析することによって、植民地支配解放から朝鮮戦争停戦までの朝鮮現代史の展開を、社会・文化史の側面、とりわけ庶民の日常生活に着目して検討した。

研究成果の概要(英文)：I researched the diary that Mr. I(1926-2000), an electric engineer at Keijyo (京城) Electric Co., Ltd (the predecessor of Korea Electric Power Corporation) born and raised in Incheon, Republic of Korea, wrote from September 1945 to 1953(hereinafter I's diary). By transcribing and digitizing the handwritten Mr. I's diary(translating to Japanese if necessary) and analyzing the diary, I examined the period of Korean modern history from the liberation from the colonial rule to the ceasefire of the Korean war, focusing on its social and cultural historical aspects, especially the daily life of the common people.

研究分野：朝鮮現代史

キーワード：韓国 仁川 労働者 日記 日常生活 朝鮮戦争

## 1. 研究開始当初の背景

朝鮮解放から朝鮮戦争停戦までの時期の歴史研究は1980年代以降に活発になされるようになった。それは、おもに政治・経済史を中心に展開されてきた。一方、社会・文化史研究は、1990年代以降、韓国の研究者らによって徐々に行なわれるようになったが、政治・経済史研究に比べて大きく立ちおけているのが実情である。

朝鮮解放から朝鮮戦争停戦までのいわゆる解放後史を全体として理解するためには、政治・経済史研究の蓄積の上に、あるいはそれらと有機的に結びついた社会・文化史を叙述することが必要である。本研究は、社会・文化史の側面、とりわけ解放後の朝鮮半島において朝鮮人がどのように解放を迎え、分断国家の成立をみつめ、朝鮮戦争を体験したのかという庶民の日常史の一端を明らかにしようとしたものである。

本研究では、仁川に住む労働者I氏が、1945年9月から1953年まで書いた日記を取り上げる。このI日記を扱う際に注意しなければならないことは、I氏が解放後を生きた朝鮮人を代表するものとして考えるのではないことである。I氏は、男性であり、植民地期に近代的教育を受けた、仁川に住んでいる電気技師である。本研究の課題は、そうした解放直後に生きたI氏の存在を念頭に置きながら、一労働者の日常や生活を通して解放後の社会・文化史を描くことにある。

## 2. 研究の目的

I日記は、2007年に仁川広域市の「水道局山タルトンネ博物館」で公開された未公開の史料である。太田はI氏の遺族の了承を得て1945年9月から1970年までの日記を複写させてもらった。そこには、解放直後の米軍の進駐、I氏の職場である京城電気株式会社での労働争議、大韓民国樹立前後の状況、朝鮮戦争下の生活、趣味の映画鑑賞、仏教信仰・民間信仰、I氏が描いた絵・イラストなど一

庶民の日常や生活がつづられている。それらは解放後の社会・文化史を叙述するうえで貴重な資料だと考え、本研究を着想するにいった。

本研究の時代的起点は、朝鮮半島が日本の植民地支配から解放された1945年8月以降とし、終点は、朝鮮現代史の分断の歴史を固定化することになった朝鮮戦争が停戦した1953年とする。地域は、I氏が生活していた仁川を中心に、I氏が出向いたソウル地域も含めて検討する。I日記に記述される政治・経済・社会・文化事象については、米軍政側資料や政府行政文書、新聞・雑誌資料などによって、朝鮮半島（解放・分断・戦争）、さらには東アジア（冷戦）全体の文脈の中で分析される。

通常、朝鮮解放後史を研究する際、米軍政側資料や政府の行政文書、新聞・雑誌資料などが使われるが、本研究では、仁川という一地域に住む、一人の労働者が書いた日記を使って、解放後の社会・文化史を描くことに特色がある。名もなき庶民が日々どのような生活を送り、何を考えていたのかを明らかにすることは、①解放、分断国家の樹立、戦争という解放後朝鮮の大きな歴史の流れを一庶民の視点から見直すことになる。また、既存の政治・経済史研究が植民地期の歴史との非連続面を強調する傾向が強かったのに対して、本研究では②庶民の生活レベルにおいて植民地支配末期の歴史との連続面、非連続面の両面を意識しながら分析、把握される。本研究は、庶民の日記を用いて社会・文化史を叙述することによって、③朝鮮解放後史をより豊かなものとするだけでなく、日本における朝鮮現代史認識をより多様なものとするのに貢献できるという点で、歴史的、社会的意義を有している。

## 3. 研究の方法

### (1) I日記の翻刻、データ化

I日記を起こしてデータ化するのは、I日

記が朝鮮語の手書きであり、そのままでは判読できない部分が多いためである。I 日記を資料として活用するためには、手書きの文書を原文（朝鮮語）どおりに翻刻してデータ化しておく必要がある。遺族の理解が得られるならば、研究終了後に資料集として公刊することも考えられ、その基礎的作業ともなる。データ化作業は、研究補助者（大学院生等）を雇用して実施する。また、日本語論文に引用する重要な部分は日本語に翻訳しておく必要がある。

#### (2) 関連する基本史資料の調査、収集

I 日記の内容を分析するためには、その内容に関連する基本文献が必要となる。解放後の政治・経済史に関わる基本的な文献（研究書、研究論文、史資料）、たとえば、解放後の主要新聞の記事を整理した『資料大韓民国史』（国史編纂委員会 HP にデータベースが公開）や主要雑誌を集めた金南植他編『韓国現代史資料叢書』1 - 15 巻（トルペグ、1986）、HQ, USAFIK G-2 PERIODIC REPORT - 駐韓米軍情報日誌 1 - 6（翰林大学校アジア問題研究所、1988）などの米軍政関連資料のほかに、1946 年 6 月から 1950 年 6 月まで仁川で発行されていた新聞『大衆日報』、仁川広域市歴史資料館歴史文化研究室編『米軍政期の仁川資料』（2004）などの仁川関連史資料、太田が所蔵している以外の米軍政関連資料、朝鮮戦争期の米側資料、I 氏の職場だった京城電気株式会社関連資料などについて、調査、収集する必要がある。

#### (3) フィールド調査、インタビュー

仁川広域市における I 氏の自宅、職場などの生活空間、I 氏がよく通っていた映画館（I 氏は映画観賞が趣味だった）や商店、食堂、寺院、そのほか日記に記されている場所などについて調査する。また、I 氏の遺族へのインタビューは I 日記の内容を理解するためにも必須である。I 日記について適切な分析を行うためには、そうしたフィールド調査、遺

族へのインタビューを十分に行なう必要がある。

#### (4) 研究成果の発表

日記の内容と、収集した一次資料、写真、インタビューの内容を分析し、シンポジウム、研究会で報告し、論文にまとめる。

### 4. 研究成果

#### (1) I 日記の翻刻、データ化

1945 年 9 月から 1952 年 12 月までの I 日記を翻刻し、データ化することができた。これにより、用語の検索が可能になり、当該時期の社会・文化史研究のために一基礎資料として使いやすいものとなった。今後、遺族の了承が得られるならば、何らかの形で公表したい。重要な記述については日本語にも翻訳した。今後、日本語の論文の執筆、著書の刊行のための基礎資料として活用できる。

#### (2) 解放後の庶民の社会・文化史

これまでの研究成果は、(5) 発表論文等に記したように、国際シンポジウム、研究会等で報告し、図書に執筆した論文「解放直後ある労働者の日常生活－仁川の電気工 I 氏の日記から」、および論文「朝鮮戦争下のある労働者の生活－二つの社会、恐怖、平和への焦がれ」で発表してきた。また現在、今年 8 月に刊行予定の論文「朝鮮戦争前夜のある労働者の生活」(仮)を執筆中である。

本研究の目的は、仁川に住む一労働者が書いた日記を使って、解放後の社会・文化史を描くことにあったが、上記の研究成果において、ほぼその目的を達成できた。とりわけ以下の 2 点について明らかにすることができた。

第 1 に、解放、分断国家の樹立と戦争前夜、朝鮮戦争という朝鮮現代史を一庶民の日常生活という視点から描くことができた。解放直後の 1945 年 9 月から 1947 年までの I 日記の分析では、I 氏が解放直後に朝鮮に進駐してきた米軍を「歓迎」し、「八・一五解放記念日」など政治イベントに参加して「解放」を喜び「独立」を願ったこと、職場では左派

が主導した「同盟罷業」に参加したこと、インフレと食糧・物資不足の中で「美国〔アメリカ〕」映画や「美国」商品など有形無形の「美国」の文物を受容していたこと、一方で朝鮮の伝統的な生活様式、仏教、民間信仰を重視していたこと、などを明らかにした。

朝鮮戦争前夜の1949年から1950年6月までの分析では、I氏が各国の大韓民国承認の報道や最初の国勢調査、政府樹立1周年記念日などについて日記に記すことによって「韓国人」「韓国民」という意識を持つようになったこと、地域や職場ではすでに戦争への経済的・軍事的動員が始まっていたこと、インフレと生活難はいっそう深刻化していたこと、過去の「倭帝」「日帝」を再解釈することによってI氏は「民族」「愛国」を意識するようになったこと、解放直後と同様にハリウッド映画やコカ・コーラ、「美国物品」を受容していたこと、政府の二重過歳禁止政策を批判し伝統的な生活様式や仏教、七星信仰を重視していたこと、などを明らかにできた。

朝鮮戦争下の1950年6月から1951年1月までの分析では、人民軍占領下のI氏は、米軍の空襲と食糧難による恐怖と不安の中で暮らし、「反動であり非協力だ」という理由で職場を解雇され、義勇軍への動員から逃れる毎日だったこと、9月半ばの米軍仁川上陸により大韓民国が回復した後は、空爆の恐怖と義勇軍動員の心配からは自由になったが、食糧難は依然として続き、再び「ひっくり返った社会」では、地域や職場で、「附逆者」「附逆行為」の審査、摘発、排除が行なわれたこと、戦線が移動して社会がひっくり返るたびに、ふだん親しくしていた地域の人々や職場の同僚がどちらの側につくかを識別しなければならなかったこと、I氏が戦争下で日々日記をつづることは、日本の植民地支配・戦争下で身についた言葉や考え方や、または大韓民国政府や米軍によってもたらされたスローガンや考え方によりながら、大韓民国国民

であること、けっして「附逆者」でないことを確認する過程だったこと、その一方で、I氏にとって日記を書くことは、戦争という非日常を生き延びるための拠り所を確保することだったことを明らかにした。

第2に、政治史・経済史では一般的に歴史の非連続面が強調される傾向が強いが、今回の社会・文化史に注目した研究ではより多くの歴史の連続面が確認できたことである。しかもそれは単に連続しているのではなく、別の新しい形に再編されているということである。たとえば1945年以前の町・洞・愛国班による植民地支配下の地域の動員システムは、1945年以降は洞・班による大韓民国下、冷戦下の動員システムに再編されたのである。

また、朝鮮戦争はたしかに1950年6月に勃発したのだが、1949年の庶民の日常生活においては経済的・軍事的動員などの戦時体制はすでに始まっていた。その意味では朝鮮戦争は1950年6月25日に突然始まったというよりは、すでに1949年からの日常生活の中で徐々に始まっていたのである。そして朝鮮戦争下においても、庶民の日常生活は存続していた。したがって戦争と日常ははっきり区別されて別々に存在していたのではなく、戦争は日常の中に、日常は戦争の中に食い込んでいたのである。

### (3) 多様な朝鮮現代史認識

冒頭の「研究開始当初の背景」で述べたように、解放後の社会・文化史についての研究は、1990年代以降、韓国の研究者らによって徐々に行なわれるようになったが、政治・経済史研究に比べて大きく立ちおけている。

本研究は、そうした研究状況を克服することをめざして、庶民の日記によって解放後の社会・文化史を叙述した。そのことによって、とりわけ日本において、多様な朝鮮現代史認識を可能にするために、多少なりとも貢献できたという点で、本研究は歴史的、社会的

意義を有していると考え。

今後は、当初の研究計画では予定していたがなしえなかった1948年1月から7月まで、1951年1月から1953年6月までのI日記の分析を進めて研究成果をまとめること、さらには1945年の植民地解放から1953年の朝鮮戦争停戦までの朝鮮現代社会文化史を単行本にまとめて刊行することを今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0件)

[学会発表] (計 3件)

①太田修「朝鮮戦争前夜のある労働者の生活ー仁川電気工I氏の日記から」朝鮮史研究会関西部会1月例会、2017年1月28日、河合塾大阪校セルスタ3階会議室1(大阪府・大阪市)

②太田修「朝鮮戦争下のある労働者の生活ー二つの社会、恐怖、平和への焦がれ」国際シンポジウム「日記からみた東アジアの脱植民地化と冷戦」(主催は同志社コリア研究センター・高麗大学校民族文化研究院)、2016年3月5日、同志社大学今出川キャンパス良心館305号(京都府・京都市)

③太田修「朝鮮戦争下の日常ーある労働者の日記から」朝鮮近現代史研究会、2016年2月14日、神戸市立中央図書館4階青丘文庫会議室(兵庫県・神戸市)

[図書] (計 3件)

①太田修 他、同志社コリア研究センター、同志社コリア研究叢書3日記からみた東アジアの冷戦、2017、316(pp.52-97)。 <https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/24735/?lang=0>

②太田修 他、同志社コリア研究センター、同志社コリア研究叢書1日記が語る近代ー韓国・日本・ドイツの共同研究、2014、398(p

p.337-375)。 <https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/18211/?lang=0>

③太田修 他、ソミョン出版(ソウル)、『일기를 통해서 본 전통과 근대, 식민지와 국가(日記をとおしてみた伝統と近代、植民地と国家)、2013、451(pp.363-406)。

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

太田 修 (OTA, Osamu)  
同志社大学・グローバルスタディーズ研究科・教授  
研究者番号：00351304

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )